

〈論文〉

昭和文学の対incest感覚一斑

dedicated to the Misses Yuki & Mika T.....

A

絶筆となった「グッド・バイ」を除いて太宰治唯一の未完長篇小説「火の鳥」(昭14・5竹村書房刊『愛と美について』初収)の「序篇」に、ヒロインの女優高野幸代の素姓を述べた奇妙な一節がある。

(祖先の、よい血が流れてゐた。曾祖父は、医者であつた。) 祖父は、白虎隊のひとりで、若くして死んだ。その妹が家督

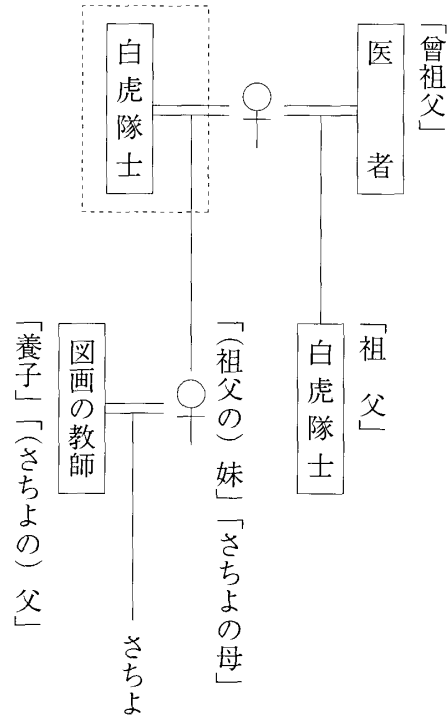
大森 郁之助

を継いだ。さちよの母である。(略)養子をむかへた。女学校の図画の先生であつた。(初刊本文。生前異版なし)

「祖父は、白虎隊……」というのだが、「その妹」が「さちよ(幸代の本名)の母」なのだからさちよから見れば母の兄、つまり伯父である。「祖父」で(も)あるためには「さちよの母」の父で(も)なければならぬ。

「兄」にして、かつ、「父」。そんな莫迦なことがあるか。善悪を別にすれば有り得ないわけではない。白虎隊士と、その母親

との関係（次図、点線枠内）を想定すれば済む。



もちろん、「曾祖父」に妻・妾二人、あるいは「白虎隊士」の生母と後添いとを想定し、「白虎隊士」と「妹」とを異腹としても大まかには「妹」とも言いそう（云っても通りそう）で、話はその方が穏やかだが、それなら一言、妾または後妻の存在にふれてないとフェアであるまい（読者としてもそこまで想定するのは洞察ではなくて恣意、妄想だろう）。

ただ、系図は書いても別に時間的な問題があつて、白虎隊士がおのれの子を宿さしめ得た（相手が誰であろうと）のは戊辰の役以前だから、「さちよの母」の誕生は遅くも明治二年（一八六九）、

(一)

養子を迎えたのを二十代半ばまでずれ込ませても、さちよの誕生は十九世紀末か二十世紀初頭か。ところが、この作品の主舞台は「昭和五年（一九三〇）の十月二十日」以後の東京だが、さちよは「十七歳」で上京して「二年」後の事とある（序篇）。だが誕生から推せば三十前後の筈。人間関係の経過年数の計算違いや年齢が場面によって異なるという例は昭和文学の名作「雪国」や「菜穂子」にも指摘されている^③とはいえ、それらは一桁前半の誤差である。

これだけ無茶苦茶では白虎隊士とその母親云々などと無理な辻褃合わせには及ばない、作者の稀有な錯乱、と云って通り過ぎたところだが、「妹」を単純な錯覚誤記として通常の父娘関係に訂してみても「白虎隊士」を父に持つ子の誕生下限は変わらず、また、兄が早世したので妹が相続というありふれた事態に訂しても（それでは「祖父」を兼ねないただの「伯父」で、行文の錯乱はより甚しくなるが）、通常の兄妹なら白虎隊士と妹の年齢差は縮まってさちよの誕生も更に繰り上がり、昭和五年には中年女、下手をすると孫が居かねまい。

つまり、さちよの家系の時間的不整合は「祖父の・妹」という一項のせいではなくて「白虎隊（士）」を組み込んだ為なのだから、時間的不整合のゆえを以て「祖父の・妹」項を単純誤記と断

じ去るのはとかげの尻尾切りか八つ当たりに近い。

——と、弁護・擁護 (incest の) めいた云い方になったが、結論としては本稿筆者も、誤植的な誤記よりはメンタルであつても要するに太宰のエラーだろうとは考えている。結局のところエラーと見る理由は、近い尊属の母子相姦という、軽視は困難と思われることの影響と解しうるようなプロットが、見当たらないことである。さちよが女学校四年の秋の、父 (凶画の教師) の出奔母 (白虎隊士の妹) の自殺、さちよは家出・上京、バアの女給になつて、非合法共産党の赤色テロ——と云いたい原文「黒色テロ」とある——の銀行襲撃メンバーの青年と心中 (未遂)、と、波瀾は少なくないものの、とくに母子相姦の血統という知識によつて納得が行くようなものは無い。

つまり、作者が意識的に、吟味の上で、へ兄妹にして父娘」という設定をなしたとすれば羊頭狗肉、或いは鶏を割くに牛刀を以てする体の過剰にして空疎な深刻趣味、とも評せようから (執筆されずに終わったずっと先の構想に対応する伏線だったか、というのは又別の議論になる)、多分、ついついこのエラー、と云つたのだが、あえてメンタルな冠したのは、作者太宰には incest taboo への一種の親近感ともいふべきものがあつたかに思われ、それが、悲劇のヒロインの身の上の設定に際して何程かは無意識

に駆り出された (そして、そのまま失念された) ものか、と考えるゆえ (そうでさえもないなら、もう取りなしようが無い) である (「さちよの母……養子をむかへた」の「養子」は後文中にさちよの「父」と明記されているが、この方は「さちよの母」の養子ではなく、「……母」のために、入夫として高野家が迎えた養子と解せるから、胡乱はない)。

太宰が遺した創作年表 (筑摩書房版全集別巻、平4・4) の昭和十三年一月の項に題名が見える「サタンの愛」は、十二月末、「風俗上こまる」として、予定した『新潮』一月号への掲載が取り止めになり (12・12・21付檜崎勤・尾崎一雄宛各書簡)、その後同題名の作品は発表されていない。当時、太宰から校正刷りを読まれたという桜岡孝治氏の記憶によれば、

姉弟相姦が書かれてあつた。伊豆の温泉町で、相合傘が狭い道をよけられず、自動車にメリメリと洋傘の骨を巻きとられる描写があり、交通事故に会い損った姉弟は、奈落の底に落ちこむように、お互いの身体の中にのめりこんでゆくという筋であつた。

(「太宰治の思い出」、『解釈と鑑賞』昭44・5)

この回想を少なくとも大筋に於て疑う理由がないなら、前出

「火の鳥」と（奇しくも？）同じく『愛と美について』初収の作品「秋風記」に瓜二つと云えて、美知子夫人の周密な考証（『秋風記』のこと）、昭53・5人文書院刊『回想の太宰治』等により、現在、

旧稿を全文改ざんすることなく、題を改め、（書き出しの一枚は書き直したかもしれないがあとは）、原稿用紙の行と行の間に書き込む程度の少々の訂正または書き足しをして、書下し短篇集（『愛と美……』をさす）の中に加えたのではないだろうか。
（『秋風記』のこと）

という推測が定着している。

前述、荒筋の相似という程度なら、「あの原稿は、私、永く保存して置くつもり」（前出榎崎宛書簡）の「わりに好きだった作品」（同尾崎宛）を惜しんでの改作という方がよりありそうな話かも知れないが、この件に関しては同時期の「全文改ざん」作品と違って「旧稿が一枚も残っていない」（『秋風記』のこと）ことが、「秋風記」イコール「サタンの愛」、――

「風俗上こまる」という理由の一つに「サタンの愛」という刺激的な題のせいもあると考え、「秋風記」という新しい題に変え

て（変える程度で）通そうとした可能性を高めよう。而して、題

名は変えながらなお、

「たいてい、わかるだらう？ 僕がサタン、だといふこと。僕に愛された人は、みんな、だいなしになつてしまふといふこと。」

という科白（傍点引用者）が紛れ込まされている（未練にも？）ことも、付け加えられる。

もつとも、「全文改竄」か「部分修正」か、「↓」か「||」かは、本稿の主旨にとつてはそれほど問題ではない。肝腎なのは、「秋風記」もまた、語り手の「私」と「二つ年上」の「ことし三十二歳の女性」である「K」とが、「サタンの愛」と同じく）姉弟と解されることである。或いは、解されると控え目に云わねばならぬ程におぼめかされていることである。

書き出し二百字ほど早々と、

Kは、私とは別段、血のつながりは無いのだけれど、それでも小さいころから私の家と往復して、家族同様になつてゐると予防線を張って置きながら、結尾近く、バスの車輪に傘を巻き込まれる場面の初めに、

「私たち、もうなんにも欲しいものがないのね。」／「ああ、みんなお父さんからもらつてしまつた。」

という、少なくとも父親は二人共通でないと半端なものになつて

しまう会話（一方だけの「お父さん」の話だと「私たち」という問いかけに対応せず、かと云って両家の父親が揃って息子娘に同じ接遇をしたというのは、一言説明が要ろう）、さらに、Kの「私は、なんでも知つてゐる。私は、自分がおめかけの子だつてことも知つてゐます。」

という発言は、Kが、同腹として育てられた（じつは）主人公の異腹の姉である場合に、最もふさわしからう。

作品冒頭の「他人」言明（前引）が余りに断乎としているので途惑うが、その言明個所からまた約二百字後には、

「K、僕を、憎いだらうね。」／「ああ、」Kは、厳肅になづく。「死んでくれたらいいと思ふことさへあるの。」／ずゐぶん、たくさんの身内が死んだ。いちばん上の姉は、二十六で死んだ。父は、（以下略）

と、肉親の死の記述が七人分（約百三十字）続く。そのきつかけとなつてゐるのが、Kにとつての主人公の死なのである。言明の通りにKと私とは赤の他人のだが肉親同然に親しいので、つい、他の、真の肉親の死を想起したもの、というのは、せめて逆の順序ならまだしも、あまりに苦しかろう。それよりは、冒頭（だけ）の言明を以て前回「サタン……」の反省に基づく擬装（こう云って置けば結尾近くなつてからの真相示唆は人目

につき難からう、という）と解するのが、前後撞着に対しての親切な（なぐり書きの作品、としない）読みであろう。

そこで本稿の視点に戻れば、異腹ではあれ通常（腹違いの）姉弟とよぶだろう男女二人の間が、

（Kは）いつ死んでも、悔いがない。けれども、Kは、生きてゐる。子供のために生きてゐる。それから、私のために、生きてゐる。

とか、晩秋「になると、毎年きまつて、いけなくなる」私が「死にたくなつてKを訪れ、「旅行」に誘うと、ためらうことなく

Kは、私を連れて旅に出る。この子を死なせてはならないとかいうものに、なつてゐる。「死にたくなつた」問答の終りに近く、旅行の誘いの前に、

「誰か、いいひとがないものかねえ。」／私は、微笑する。ともあつて、一般的にはこういう場合の相手になる筈の「いいひと」を持たないらしいが、その場合に代役となりうる（或いはいいひとがいても、かも知れず、そんな人を作るわけがない、かも知れないが）関係なのである。

もつとも、「サタン……」と異なり、「秋風記」では、交通事故の後、Kを

ちかくの病院まで、（略）背負つていつた。（略）Kは、病院

に二日ゐて、駆けつけてきたうちの者たちと一緒に、自動車
で、自宅へかへつた。私は、ひとり、汽車でかへつた。(一
行アキ) Kの怪我はたいしたことないやうだ。日に日に快
方に向つてゐる。

と、事なく収まっているが、だからといってこのストーリーを本
稿の視点に於て deny したり「サタン……」とは別範疇視したり
するならば、かの「天の夕顔」をはじめとして幾つかの昭和戦前
恋愛小説の名作が分類替えされることになる。

そしてもう一つ付け加えたいのは、前引桜岡氏の回想記によれ
ば、後日、「サタン……」のことを思い出し、その連想から「同
性愛をどう思いますか」とたずねたところ、

太宰はびくりと身体を動かし、「ワア、よせ、あれはきたな
い！」

と答えた、という点である。

同性愛と言われてとっさに太宰が思い描いたのは pederasty
だったか、lesbianism だったか。訊いた者も訊かれた者も男性だ
ったこと、及び、近代(に限らないが)日本の社会生活と文学と
の好尚⁽⁵⁾を背景に置けば前者と見るのが順当だろうが、これを
incest と対比するなら、まず、何らかの意味で自分と「同質」の
相手(同嗜好、ではない)との関係に安らぎをおぼえる(から、

求める)という点は共通し、ただその「同質」が肉体的生理的
(sex)及び社会的(gender)にか、血統的生育史的にか、の違い
である。また、共に公序良俗から排斥される、その理由はといえ
ば、pederasty は肉体的生理的に反自然(プラトン『饗宴』の人
間始源説を援用するのは『きけわだつみのこえ』旧版なみの本文
改竄の上での似而非ペダントリイだが、人間にも動物にも一般的
でない(動物にない、というのは誤り)のは確かだ)かつ種属維持
の妨げとなる恐れ、incest の方は論理的にはかなり曖昧な反道
徳性(諸民族の神話や、近世でも名門豪族の系図を思い合わせれ
ば曖昧といわざるを得まい)に、それぞれ絞れよう。

太宰の同性愛却下がその非(用語から考えれば恐らく肉体的生
理的に?)を挙げる形でなされた(癒し効果の小でなく)とすれ
ば、逆に、斥けずむしろ執した incest の方の「反道徳」性は、
少なくともその故に斥けるべき程とは認めなかったわけであろう
(全く無視はしなかったから「サタン……」と題したのかも知れ
ないが、「サタン」は私の人柄を称したとも解せる)。

ともあれ太宰が、げんに同性愛モチーフの作品を遺していない
ことは桜岡証言の信憑性に関らぬ厳然たる事実だが、その事実
同時に、incest モチーフへの執着状況を浮かび上がらせもする。
そして桜岡氏の記憶は、この、同じく反良俗の二種の愛の一方の

みが何故太宰に扱ひ取られたのか、という形で、このモチーフ（太宰にとつての、と限定してもいいが）を見直させる。——単に反良俗のゆえではなかった。では、何のゆえに？

註

1 初刊本文は「妹」に作るが「妹」は「女子の名（固有名詞）」または「未だ学ばざる者」などの意とされ、younger sisterとは異義、またそれ以外の血縁関係を示す字でもない。字画近似のための最も単純な誤植と見るしかない。

2 「白虎隊」は身分別に三隊に分かれ飯盛山で自刃したのはその中の一隊、また自刃二十隊士中の一名は蘇生したというが、だから「祖父」が慶応四年に死んだとは限らない、というのは完全な強弁である。へ白虎隊士」と聞いた場合の通常一般のイメージ（連想）からみて、もし飯盛山に赴かなかつた、又は蘇生した隊士なら一言註記しなければ詐術に属そう（そもそも、もしも本当に太宰がそのつもりで書いたのなら、いったい何のために？ それもまた一つの翳り、か？）。

3 関良一氏「『雪国』考」（『川端康成の人間と芸術』、昭46・4教育出版センター）、大森「『菜穂子』年立考」（『札幌大学女子短大部紀要』十一号、昭63・2）。

4 「この子」がKをさすとする説もあるが（例えば鶴谷憲三氏「『秋風記』論」、平9・7『太宰治研究』4）、そもそも死の危険性（放つて置いたら、一人にしたら）が、少なくとも言葉にして示されているのは、訪れて来て顔を合わせた途端の

「いくら？」／「お金ぢやない。」／Kは、私の顔を覗きこ

む。／「死にたくなつた？」／「うん。」

以下、「私」について六回、Kは、芸者を交えて（当然）冗談のようにしての「心中しさうで危い」という一回だけ。言葉にしなくとも云えばその通りだが、その場合は「私」についてもさらに殖えよう。

また、前文「Kは、私を連れて……」との繋がりがだが、（死にたくなつた）と言う「私」が旅に誘うので一人で行かせては旅先であぶないから同行する、というKの心境としてならもつともだが、別段死にたがっても旅に出たがってでもないKをこちらから誘って置いて「死なせては……」とは、どういう一人合点か。旅中危険だと思つたら誘つたのを取り消せば済み、自宅に置いては危険だというなら一体どの位、旅から帰らぬつもりなのか。何とも説明のつかない心理ということになる。

「この子」という呼び方自体も奇妙で、かりに芯は（真実は）Kの方が弱くて「私」に縋っている（ところもある）としても、比率的に・大勢としては、弱者として振舞っているのは「私」である。この一ヶ所のみ突然変異的に、二歳年長の姉を「子」呼ばわりする理由が判らず、「私」を氣遣うゆえに保護者として同行するKの独白としか解せまい（Kの独白はここ一ヶ所だが、前文「Kは、私を連れて……」という「K」の立場から捉えた表現も又、この一ヶ所のみ。Kの独白が他になら「この子……」も私から見たKとるというなら、その前に「Kに、私は連れられて」でないことを訝らねばならない。そして行動・独白とKの立場からの表現が二文続くことで、それぞれの孤例性^{II}異様さ（そう解することへの不安）も薄まること却又、それぞれの解の妥当性を支えよう。——以上は本文の正しい読みという一般論の他に、姉弟の感情の相互性、少なくともここでのincestが一方的な思い込みや片思いという「不健全」性を免れている明証として、註した。

5 文学作品に於ける男性間性愛の偏重（「仮面の告白」の開き直り等を含む）もさる事ながら、女性間性愛への甚だしい無視（古典文学）・蔑視（近代文学）の、とくに後者については「要略・日本近代小説の《貝合せ》」（本紀要五号、平10・3）に詳説した。

B

昭和二十九年三月、雑誌『文芸』の第一回全国学生小説コンクールに当選（一篇）した深井迪子の、商業誌掲載第二作「夏の嵐」（『文芸』昭31・4、第三十五回芥川賞最終候補作品）は、平野謙の「今月の小説ベスト3」（毎日新聞昭31・3・20）で「なぜかこの作者はこういうテーマに執ようにとりくんだのか、という点がよくのみこめなかった」「なぜそういうカタストローフを設定しなければならぬのか、という点が私にはよくわからなかった」「必然性が、結局のところよくわからなかったのだ」と、当該章（「力作『夏の嵐』（深井迪子）への疑問」）全六百字少々の中で三回、繰り返された。

もつとも、総括としては「こういう新人の文学的努力を、たとえイミテーションめいたきらいがあるにしても、それとして認め」てはいる（ともかく「ベスト3」に入れている）のだが、そして、これだけ「おお根のところ」で「わからないのにその「努力」を

「認め」得るということの奇妙さは措くとしても、じつはその、いわば根元的な不納得が、複数個（複数種類）の本文誤読（？）に基づくらしいのだ。

本作の主要登場人物は、或る地方都市（？）国立大学も「区立」図書館もあるが、「英文科では一流の聞き高い」私大？へは「汽車で八時間もかかる」の中流家庭の、長姉・次姉（私立中学の教師、二十五歳くらい）と、弟（じつは早く孤児になった従弟。大学生、二十三歳くらい）、長姉の婚約者の青年（母校の大学の実験助手？ 三十前）。姉二人はかなり性格が違うので仲は良いとは云えないが、「滅多に争いが起らないのは」長姉が「ムキになる性質でなく」、次姉は「姉を相手にするに足りないと考えているからである」。ただ、長姉の婚約者と次姉はかつて刺戟的な印象に残る出会いをしており、婚約後に再会すると予想もしなかった深みにはまって行くが、長姉は作品の終りまではっきりとは気づいていず、煩悶や自責は当事者二人の内に留まっている。

他に、次姉が母親の実家を継ぐため養女に行っていた時期があつて、その間はかなり可愛がってくれた養母への屈折した感情とか、宗教上の理由から反戦主義者だった父親の微温的な性格とも点綴されているが、それらは平野評がこだわったゾーンを遠巻きにしている風景か、せいぜい影を投じている山々といったところ

ろであろう。

平野評で最初に疑問とされる「こういうテーマ」とは、「こういう」という指示語から前に辿って行くと「(本作と)おなじテーマを展開している(略)『日蝕の夏』における石原(慎太郎)の肉親憎悪」云々とある。だが「夏の嵐」を一言で「肉親憎悪」テーマと括ってしまうのは粗雑というより誤認と思われるし(後述)、だいたい、「なぜ○○テーマに取り組んだか」と問われて「(○○に)心を惹かれたから」という以外の答がある作品・作家というのは、かなり特殊なのではないか(平野にはまだプロレタリア文学時代の後遺症があったのか?)。もしかして、(肉親憎悪をもっともなものに感じさせるような設定や描写になっていないと云いたいなら、そう云えばいい。

では、次文にそうしたパラフレーズがあるかというところ、話は逸れて、

三人姉妹の恋愛上のいりくんだ心理的葛藤を、姉弟相かんに

よる姉の自殺というカラストロフにまで持つてゆく(略)

なぜそういうカラストロフを設定しなければならぬのか、

という点が(略)

「よくわからない」と続いて行く。

この部分についてはまず「姉弟相かん」という乱視を訂して

おかねばなるまい。前述の通り「僕(弟)は習慣上彼女(次姉)

を姉としているが、実は従姉で」「僕を育ててくれた人達(伯父伯母?)が巧みに隠し了せたつもりでいるので、僕は何も知らないふりをしているにすぎない」。姉(従姉)の方も事実を知っているのかどうか(こちらは実子で年上でもあるから、半々よりは知っている可能性の方が高いとすべきであろうが)はともかく、法律上は新旧民法いずれも従姉弟であれば婚姻は禁じていない。婚姻さえ妨げない程度に隔たった血縁関係が、婚外交渉では「相姦」と凶々しく、少なくとも如何にも重大な意味ありげに、云われるのか。

系図的にいえば従姉弟だが生活感覚的には姉弟同様だから、という論理は、だからの先が問題であって、だから法律上は認められていても民間の感覚としては「相姦」だ、というのは適用過度、少なくともその一語で割り切り押し切るのは文学作品評にはなじむまい。

次の誤読(?)は「姉弟相かんによる姉の自殺」という因果関係の認定である。

「……自殺というカラストロフにまで持つてゆく」の「にまで」という云い方は、「恋愛上の……心理的葛藤」の帰結として「……相姦……自殺」は不自然、事を大きくし過ぎ、という意味

だろうが、その強引・不釣り合いは姉妹（長姉と次姉）の三角関係と従姉弟相姦^{*}とが、か。それとも相姦と自殺とが、か。それとも（文脈上）相姦・自殺をワンセットにして、その「カタストロフ」と発端の三角関係とが、か。ともかく結合の後項を過大と難じた云い方だから、三角関係と相姦との結合を難じているなら相姦への異常事件視、相姦と自殺の結合ならへ相姦くらいのも事で、大仰に〜という相姦の平凡事視を示唆し、本稿の視点にとつても決してどれでも良くはないのだが、その点、平野の行文が十分明確ではないので判定は少時措く（程なく戻って来る）。

※論旨に反するが適当な云いかえが思い当たらないので「相姦」を、また便宜上「姉」「弟」を流用する。

そしてその前に指摘できるのが「相姦による……自殺」という認識、因果関係把握の、事実誤認である。

時間的にいうと、次姉に導かれて「明方迄彼女のベッドに居てしまった」僕が「忍び足で隣室へ戻つ」た、その日の、姉弟三人に長姉の婚約者を交えての海水浴行で、台風が近づく荒れた海から婚約者一人引き揚げて来ず、逆に、次第に岸から「遠ざかって行くようにさえ見え」た時、次姉は

体中鳥肌立って慄えているが、その異様に白い顔は、まるで憤怒が妖しい花を開いたようだ。そして彼女は沖に向つて叫

んだ。 / 「帰って来ないの？ 卑怯よ！ 卑怯よ！ 私はそんなこと許さない！」 / (略) 彼女は泣いているように見えた。「卑怯だわ！」稜子はもう一度叫ぶと、まっしぐらに怒濤の中に突進して行つた。(5章)

時間的に（各アクシデントの順序と、時間の経過）も、心理的に（憤怒云々、「卑怯」云々）も、次姉稜子の入水の直接の動機は愛人（長姉の婚約者）の入水である。前夜の相姦は次姉に生きる氣力を失わせ、無意識に（？）死を望ませていたかも知れない（そういう記述はないが）、としても、愛人の入水という新たな・別の事態に直面するまで、それ単独には、げんに行動を起こさせていない。また、愛人の入水に対する「憤怒」や「卑怯」という決めつけは、かりに稜子自身の内にも死への願望がうごいていたとしても別の心因がその行為化を承認していなかったらうことを、示唆しよう。

しかし、いくら男を卑怯と罵つても結局その後を追うように海に入った稜子は、所詮同類ではないか、という反論は正鵠を欠く。男は「二年も前」の稜子との最初の出会いの頃から既に自分が「生存に値いしない」と「だいたい死ぬことばかり考えていて、今回の自裁もその延長線上に位置づけられる。しかし稜子の眼前

には自分と深い関りを持った男の自死という、そうではあっても非・内在、たとえ稜子との関りが引金になったとしてもやはり外在、自己責任外の事情が生じていた。その外在アクシデントへの対応としての自死を選んだのは勿論稜子の自己責任だが、その経緯に於て、自己完結型（男）と外圧型と（二分法にこだわれば）の違いは、確実に存する。

ところで先程、平野評で不自然視された展開はへ三角関係↓相姦↓自殺の中の、どの↓か、を保留にして置いた。見て来た通り稜子の自殺が相姦による、とは云えない、少なくとも不正確（そう云ったのでは云い落した部分の方が大きい、あるいは歪曲になる）だとすると、少々話がややこしくなる。即ち、平野評の対象個所がもしへ相姦↓自殺↓だったとすると、そんな↓は評者の錯覚の中にしかないのだから（作者はそんなストーリーを提示していないのだから）平野評は風車に立ち向かうドンキホーテの勇姿と化す。よもや平野にそんな愚行はあるまい、と考えれば、へ三角関係↓相姦↓を批判したものと解せて欲しいわけだが、皮肉にも、救いの手は平野が「……相かんによる……自殺」と、誤解して述べた、まさにその事実から、差し伸べられる。

自殺の因として相姦を誤認逮捕した（それほど紛らわしい本

文ではないのに！）ということとは、自殺の因を求めて近辺を見回した時たまたま眼に入った（？）相姦をへこれなら可能性十分、犯人として妥当とする先入見があった場合に、最もふさわしいのではないか。そして相姦ということが平野に、その結果として当事者の自殺を容易に予想させ納得させる種類の異常事態と観じられていたなら、一方、こちらは、それに比べれば異常（？）度はずっと低かろう三角関係（姉妹間であっても）の心理的葛藤の、その結果としては、（相姦は）飛躍、作者の暴走としたくなくても平仄は合うのである。

さて、六百字の短章中に三回発せられたへわからないの最後は、「敗戦以来のわが家族制度の崩壊ぶりが、こういうかたちで（略）現象しなければならぬ必然性」が「結局のところよくわからな」い、というものだった。

姉と妹との三角関係を家族制度から見れば多分「崩壊」か、それに近い云い方になるだろうが（「悌」の喪失）、視点や角度を指定された特集記事でもないのにまず家族制度から見てしまうメンタリティには違和感もあり、敗戦前にはなかった事か（少なかった、なら本作でも簇出しているわけではない）という疑問もわくものの、常に非常時・未曾有と唱えていなければならぬのが凡そ時評の宿命ならば見逃してもいい。しかし、本作

を論じた章の冒頭で作品のテーマに擬されている(前述)「肉親憎悪」の云い換え又は一面として云われているのなら、「夏の嵐」の肉親関係は「憎悪」も含みはするがそれが大部分とも主要部分ともいえないことを註しておかねばならない。

問題を長姉・次姉・弟の三者間に絞ると、まず姉二人の間が気が合わない・互いに虫が好かないとは云えても、「憎悪」では誇張になることは前に述べた。長姉はまた弟にとつても、批評はしても批判まではどうか、むきになつての非難など、とても、といった軽い存在である。

長姉の婚約者と次姉の関係、すなわち三角関係の核心部分は長姉には知られていないから、長姉は婚約者への次姉の態度に刺戟されて心を騒がせる程度である。次姉の方でも、長姉を気づかつて抑制はしなかつたものの、べつに長姉を憎むがゆえに割り込んだわけではない。

結局次姉と弟の関係だろうが(本作は全五章から成り、奇数章が弟、偶数章が次姉の各一人称独白体)、二人の間に事が起こる前夜まで、少なくとも姉の方には「今迄の弟は、私がどんな横車を押しても、黙認し、寛容し、加担さえしてくれた」という認識があった。

それを「今迄」と限定するのは、この夜、男(長姉の婚約者と

は別の)からの電話に居留守を頼んだ時「蔑みの眼をして反対を唱え」られたことに愕然とし、「よく考えてみれば、彼はいつだって真の味方(略)の如く装いながら、実際は冷やかな傍観者だったのだ」と悟る。それでもまだ翌晩、弟と対しているうちに、

(略)自分にはもはや縁なきものと思われるあらゆる浄らかなもの、美しいものに対して、狂暴な嫉妬を感じていた。椅子の背に肘をかけて気楽そうな美しい姿勢で本を手にとつている弟の姿にも、その子供っぽい唇から流れる澄んだ声にも、(略)身を灼く嫉妬を感じ

て、事に及ぶ。すなわち「衝動」的に「まだ誰の唇も触れたことのないに違いない、柔らかな花卉のような唇に接吻」するのだが、「最初の一瞬、抵抗の素振りを見せた」弟は「後は寧ろ積極的に私の欲望を迎え」、「取乱した様子」もなく、

「姉さんが汚した積りでも、僕は汚されていないんだ。僕は汚れたと感じない。」

と答える。

弟の「無反省」な自己肯定、「麻痺した人間性」に気づき、今まで「私のかすかな支え」であった「弟という良心のかぐみ」を「無残に打破られ」て、「私の嫉妬は目標を失って宙に迷つてしま」う。そして「今こそ、私は恥じたり呪つたりすることから解放さ

れて、啓司（長姉の婚約者）への愛情を美しく貫こうという気持ちになりたのだが、それ程自分に甘くなるのが出来ないで、どうしたらいいのかわからない」というのが、その朝（明け方弟を寢室から去らせた後、姉・弟、長姉の婚約者と海岸へ向かう前）の、次姉の心境だった。（以上、4章）

「イミテーションめいた」（平野評）プロットやその具体的本文化における巧拙にかかわらず、ストーリーとしては明らかに

好意、肯定——憧憬

←

失望

という推移になっている。持続した期間と、対応する本文の量において前項の方が優位、つまり主であるという論理は、少々単純計算に過ぎるとしても、前項、弟への「買取り」「憧れと嫉み」は「殆んど滑稽な位」（弟の評）だったし、手の届かぬ理想を汚し壊したいという気持は憎悪を含む・或いは憎悪に類するとしても、あくまで憎悪とは対極——の「一つ」の思いを前提としている。そして何より、後項の「失望」さえも、「憎悪」も検出はさせようがそこに留まらず、弟を離れて自身の呆然自失へと拡がっているのだ。

後項まで含めて、弟に対する、ではない、に関わる次姉の感

情を「肉親憎悪」とするのは、いわゆる木を見て森を見ぬの甚しきものだろう。ついでに言い添えれば、次姉から「冷酷で無理解」と難じられる弟には弟なりに、姉の憧憬も自虐も「所詮観念の空転にすぎ」ないのでその「夢を破つ」てやったのだ（昨夜）が「僕の献身は無駄だったらしい」（5章）、という弁明がある。この作品の主人公はどう考えても次姉だろうが、副主人公あるいはより視点人物的な弟にも、少なくとも意識された「憎悪」と呼べる程の悪感情——は謂い難いのではないか。⁴

以上、この章の初めにも言ったが、平野は対象本文の読み違い・見落し（？）を繰り返して、いわば架空の作品本文について（従って）妄想上の「異常」を指摘し不納得を云うのみなのである。新聞原稿の慌ただしさに一因を索めるのは却てプロに対する非礼だとすれば、結局、先入見なく冷静に対応し的確に読みとり難いモチーフに直面した評者の、組み合わせの非運（誰でもそうだというわけではなさそうだから）を臆測することになるだろう。

「昭和文学の……一斑」だから作家・評論家それぞれだった一例ずつだが、全く偶然ながら、正式の結婚もしないうちに分家除籍されながら終生家郷への思いを断てなかった太宰（明42生）と、

生家の僧職を継がずに上京しながら自己の古稀記念に亡父の遺稿集を編んだ平野（明40生）と。似通うか対極かといえば似たありようの対・生家関係——対親族関係？ それと、両者の対incest感覚の対蹠的な相違とは、関連づけられないというわけでもなからうが、そうした結果の空しさが予見される。

〈昭和文学の……感覚〉には、これだけの幅があった（確かめるまでもなかった？）、——いわゆる無頼派の最流行作家（後年、だが）と、対象文学者の実生活掘り返しで知られながら「中途半端が大好き」と公言した現場主義の評論家とで。これは些かならず興味があつた、とだけ云っておく。

ところで、平野評だけあげつらつて評の対象の深井作品は平野へのアクセス、となつては無礼に過ぎるから結びを添えると、平野の直観（？）に反し太宰作品とは一脈相通ずる、近親への愛惜と凭れかかりのなみなみならぬ深さは、（異常性愛という質的非〈常〉性と恐らくリンクしつつ、しかし別個に）銘記されていい。自殺の因となつたのは愛人だが、それとは別の・それに匹敵する衝撃として「人間の底知れぬ怖しさに茫然と」させ、これから先「どうしたらいいのかわからな」くしたのは、余人ならぬ（愛人などではなく、また自分自身でもなく）弟の内面の実相を思いつたことだった。〈相姦〉どころ以前、〈近親〉ということ

（もの）それ自体の重さである。

先年、昭和戦前の時代劇映画「に付き物の『恋人のような妹』」について、

戦後派の眼から見ると、何故昔の人はああも妹を恋人なみに可愛がるのか得心がいかないものだが、

という一般的傾向の極致として、昭和十一年制作の某作の主人公が

恋人お袖を思うようになった理由。其れはお袖が、己の妹・

秋江に生き写しだから（！）。

と結んだ一文を見た。（『ノーサイド』平7・9）

巫山戯ているわけではない。そういう傾向が大衆娯楽に成立した（し得た）事情に思いを致したい。理論や思想のようには（程には）変り身の早くない感覚の、とくに飴も鞭も入らない部分は、昭和三十年代初にまだ戦前が残つていても奇妙という程ではない。⁶

ひよつとしたら平野の錯乱の方こそ、さすがに新時代の文化人だったかも知れないのである。

註

1 本作発表の翌月号『群像』（昭31・5）の「創作合評」でも、この点

は

「(略) 但しそれは従姉弟同士だったという風で、だからここに性的関係ができて不倫とは言いきれないものがあるわけだ」(寺田透)

「ところが、片方の『稜子』は『明』という弟が実は自分の従弟だとは知らないわけだ」(佐々木基二)

「え、そうなの？」(中村真一郎)

「知らないことになってるらしい。——それはほくの解釈ですよ。

知らないとすれば、この『稜子』はほんとうは弟と関係しちゃったわけでしょう、近親相姦だね。そうするとやはり相当なシヨックを受けるはずなんだけれど、作品の中ではそこが非常に軽くイナされてい

る」(佐々木)

「だから知ってるんだらう」(中村)

「知つてるとも知らないとも言いきれないような、そういう狡い書き方ですよ」(寺田)

と問題にされていて、その、十分問題になる所を平野はあっさり地雷原突破してしまっていることは間違いない。ちなみに、作中に明示されているのは周囲が弟本人に対して事実を「隠し了せたつもりでいる」ことだけで、姉(達)に対してもとは書いてない(姉は知つているとも書いてないが)。佐々木の「姉は知らない」説は弟への姉の対応等の感じからかと思われるが、それよりは「相当なシヨック」に至らない「イナさ

れ」方から推測する方が説得力がある。もともと、この合評は全体として作者未熟説になっていて、シヨックを書き切れなかつただけ(じつは知らなくてシヨックだったのだが)という論理もあり得るが、平野説はそうした曲折など無縁で一議に及ばず断案し去り放しなのだから、両論の可能性で弁護はできない。

2 前註の合評では「姉」との事後も「関係する以前と(略)全然同じ

状態」(佐々木)「無傷」(中村)の弟の「非常にチャイルディッシュ」(同)なことが指摘されているが、姉についても前引「相当なシヨックを受けるはずなんだけれど(受けていない)」の主語として、自殺に結びつけて捉えられてはいない。むしろ逆に、二人の「関係」は「読者を釣ろうとし」た「作品上の道具立てにすぎない」(佐々木)「ここでは近

親相姦ということはなり立ってない(実質がない、の意か? 引用註)」(中村)といった意見(三人中の二人)が出されている。半年後の芥川賞選評(『文芸春秋』昭31・9)でも、ただ一人好評の中村光夫にこの件「の設定など不必要と思はれ」と云われている。多数決で決まることではないが平野評での本件への注視の独自性は云えよう。

3 この一家の周辺には、前述稜子の養子縁組先で養父が戦死、稜子は生家に連れ戻され養母は再縁、といった破綻があつたが、それをも数え立てるのは幽霊屋敷の証拠として親しい隣家の多病をあげるようなものだらう(こちらの一家にとってはむしろ復旧である)。

4 芥川賞選評で宇野浩二が「アケスケな、いたづら好きな、蓮葉女の稜子と、純情で単純なやうで、心底は凶々しくて不敵で異常な好色漢である明」と姉弟の人物性向を罵っているが、(肉親)憎悪は(目につけばこれも指弾されそうだが)指摘されていない。

5 例えば朝日新聞(31・3・22)の山本健吉「文芸時評」は、「戸籍的には姉弟相かん(姦)のクライマックスを経て、最後に稜子が海中に没し去る破局まで、息もつかせずに読ませる」とする。クライマックス視は前引「群像」の合評と意見を異にするわけだが、「戸籍的には」という限定・形式視や「息もつかせず」云々等、匆卒に読めば誰でもおぞましい相姦による不自然な破局と受けとるといってもなさそうである。

6 映画評引用と相殺すべくEidos小説史を溯れば、その最も早いピーク「寝白粉」(明29)の結尾も、妹お桂が今度こそはと「只管渴きに渴ける喉を鳴らしつゝ、(略)目も眩れ、心も眩みて、命も是ゆゑには惜からず思」った相手に、結局は又新平民の素姓ゆゑに身をかわされ、いわば外に求めての完全な絶望の結果、兄によって満たされたのだった。行き詰まる迄は思い及はない相手ともいえるが(そうでなければ困るだろう)最後の倚り継り所ということでもある(兄がいなければ万年白歯で終ることもありうるわけだ)。昭和と限るわけでもなかつたらうか。

(付記 本稿筆者には同腹異腹共、女はらからは一人もいない。

平14・6・13)